

海外協力の 現場から

タンザニア編

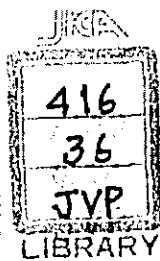
青年海外協力隊員
の記録

昭和55年3月

海外協力隊員生活

305

海外協力隊員生活



事業団
海外協力隊事務局

JICA LIBRARY



1063488[9]

国際協力事業団	
入 日 84. 5. 24	416
登録No. 07394	36
	JVP

序にかえて

昭和55年3月

青年海外協力隊
事務局 局長 黒河内 康

ここに、青年海外協力隊員の活動に関する報告書集をとりまとめ、協力隊事業に直接かかわりのある各位はもちろんのこと、日ごろから協力隊事業に深い関心を示され、ご支援を賜わっている多くの方がたの利用に供することができることは、私のまことに欣快とするところである。

協力隊員の活動は、開発途上国において国づくりにいそしむ人びとの“お手伝い”が目的である。時には、お手伝いでなく、自ら手を下してしまいたい誘惑にかられることがあって不思議はないし、事情が許せば、それを排除するまでもない。しかし、多くの場合、「代位」ではなく「介助」であり、もどかしさはもちろんのことだが、いろいろ屈折した感情が累積することもある。

その中で、より一層、途上国の人びとの中に融けこもうとし、協力手法を改善充実しようと悩み、工夫している過程から生まれた報告書は、貴いものである。報告書に書かれていることはもちろん、書かれなかったことについても。

この報告書集に収録したものは、そうした数多い隊員の報告書の、ほんの一部分にしかすぎない。協力活動の側面も限られているところがある。続編にその補充を期待したいと思いが、読者各位におかれては、この報告書集を手がかりに、協力隊員の活動の間口と奥行きが大きく、かつ多様なることを推察していただきたいと念じている。

協力隊員の技術・技能は、水準が高いだけでも十分でないし、日本式の技術移転で成功するとも限らない。技術・技能をもった協力ボランティアにしてはじめて、途上国の技術・技能の中堅層の育成につながる手法や径路が生まれると信じている。teacher of teachersとして、あるいはtrainer of trainersとして活躍できるよりは、1対1のカウンターパート養成に終わることもあることに、南北問題のむづかしさがある、と感じとっていただければ幸甚である。

この報告書集では、関係職種の協力隊技術専門委員の方がたのアドバイスをいただいて、隊員(OB)の追記と合わせて掲載した。現在活躍中の隊員はもちろん、これから協力隊に参加しようとする青年諸君にとって裨益するところ多いと確信する。ご協力いただいた各位に感謝の意を表したい。

タンザニア編

目 次

序にかえて……………黒河内 康(1)

I 二つの任地での通算3年間の見聞……………小滝 勝信(5)

日本に帰って考えること……………小滝 勝信(10)

小滝隊員の報告書を読んで……………上川 修二(19)

II MBEYA州の畜産の現状と私見……………南 繁(21)

印象に残った二つの言葉……………南 繁(33)

南隊員の報告書を読んで……………松山 茂(39)

III 苦労も多い末端組織での活動……………細川 和久(41)

日本に帰って考えること……………細川 和久(47)

細川隊員の報告書を読んで……………松山 茂(50)

あとがき……………高橋 成雄(52)

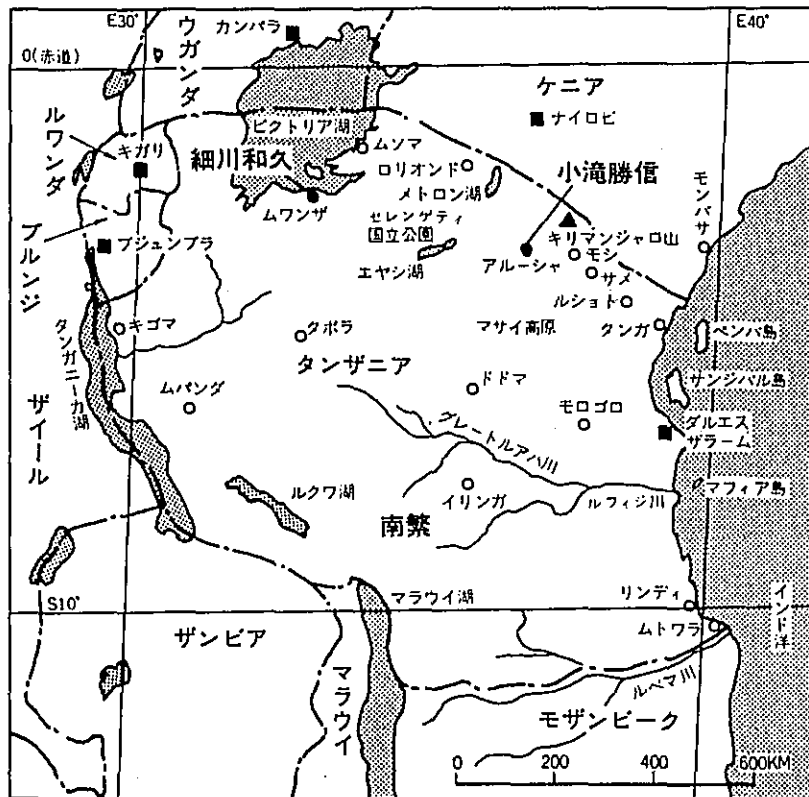
(付) タンザニアと協力隊……………(2)

タンザニアの略図と概要……………(3)

タンザニアと協力隊（昭和55年3月1日現在）

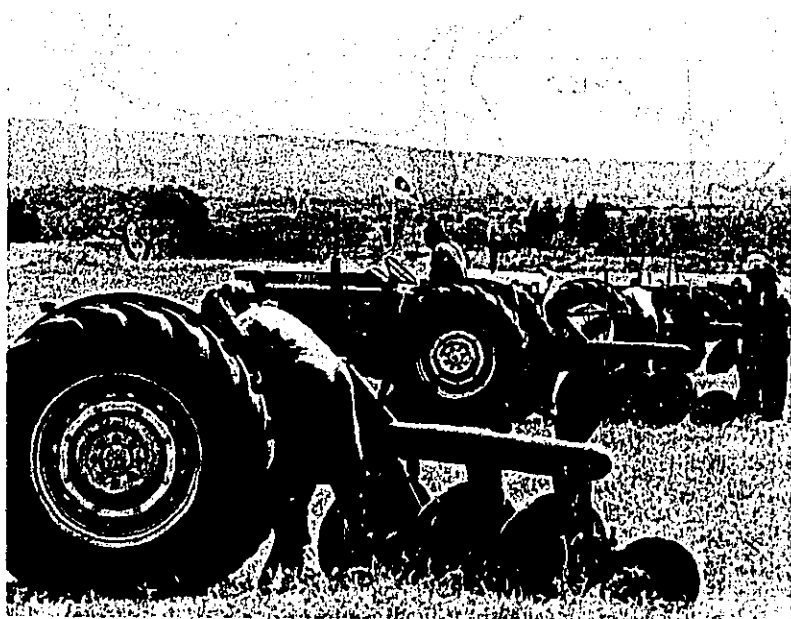
最初の隊員派遣：昭和42年3月								
職種部門	農林水産	製造	保守操作	土木建築	保健福祉	事務文化	教育訓練	合計
派遣中	15		14	7		1 (1)		37 (1)
実績 (累計)	139 (5)	3 (1)	51	28	9 (9)	29 (28)	39 (7)	298 (50)

(注) カッコ内は女性隊員。



タンザニア連合共和国概要

- ・面積：945,087 平方キロメートル（日本の2.5倍）
- ・人口：1,607 万人（77年国連推計，人口密度：6.8人/km²）
- ・宗教：イスラム教（31%），キリスト教（25%），原始宗教
- ・公用語：スワヒリ語，英語 203トム（77年）
- ・1人当たりの国民所得：463ドル（日本4,937ドル，76年）
- ・通貨：タンザニア・シリング，1ドル= 8.33 シリング，1シリング=約 33円
- ・首都：ダルエスサラーム（52万人，75年）
- ・元首：ジュリアス・ニエレレ大統領
- ・主な輸出品：コーヒー（40%，77年），綿花，カシューナッツ，サイザル麻



二つの任地での通算3年間の見聞

総合報告書
派遣国 タンザニア 50年2次後期組
職 種 自動車整備
氏 名 小滝 勝信
配属先 Tanzania Dairies Ltd.,
ARUSHA

— 小滝隊員の略歴 —

氏 名 小滝 勝信
生年月日 昭和25年6月13日
出身 県 埼玉県
職 種 自動車整備
派遣期間 51年4月～54年4月

I 第 1 任地

任地：タンザニア国，マラ州，州都ムソマ。

世界第 2 の湖といわれるビクトリア湖東岸，ケニアの国境まで約 100 km の所に位置する。

所属先：タンザニア家畜局，ミルクプラントのムソマ工場及びウテギ工場。
期間：昭和 51 年 4 月より約 2 年間活動し，その後ミルクプラント本部のある
アルーシャへ転勤。

気候：この地はビクトリア湖面と同じく標高約 1,030 m あり，日中は暑い夜は割合涼しい。シーズンは小雨期，大雨期，乾期とわかれている。寒い時期は雨期であり，長袖が必要になるくらいである。

部族：この地はもともと湖を利用した少数漁民の地であったが，船を利用した交通や物資運搬の基地として発達し，それにもなって各部族が定住している。なお山間部族等が魚や物資を求めて山から出て来，そのまま住みついた例も多い。最も多いとされている部族は，近くにキジタという地方があり，そこに本拠地を持つジタ族であろう。その他ジタ族と同系のクリヤ族，クリマ族，クワヤ族，そしてニエレレ大統領出身の少数部族ザツキ族，タンザニア最大の部族といわれ同じくビクトリア湖畔のムワンザに本拠地を持つスクマ族，同じくケニアのビクトリア湖畔キスムに本拠地を持つジャルオ族等であろう。

この後者 2 部族は距離的には遠い所に彼らの本拠地を持つのであるが，互いに湖に面している所から，岸づたいに小船等で移動してきたものと思われる。そしてスクマ族の定住地の北限とジャルオ族の南限がほぼムソマであると思う。以上の部族等より成り立っている人口 3 万にも満たない小さな町である。

現在では一つの国家のもとに部族間の対立も無く共存し合っており，婚姻においても問題は無い。これはニエレレ大統領の政策の中で最も成功したものの一つである共通語の助けによる所が大きい。つまり，どんな地方に行ってもスワヒリ語が通用するからである。しかし彼らが同じ部族の人間と話す時は彼らの部族語を使用している。結婚をする際にも町に住んでいる若者はわざわざ自分の出身集落まで相手を捜しに行く場合がある。そして喧嘩等をする場合は，相手の名前よりはむしろ部族名を呼びすてにする場合が多い。

産業：現在ムソマで最も大きな産業といえば棉花である。これは水分が少なく荒れた土地でも栽培しやすいことと、綿を取った副産物として、種子から高級な綿実油が取れることである。今まではこの綿を輸出し、衣類を輸入していたのであるが、現在紡績工場を建設中であり、これが完全に出来あがればタンザニア国内でもかなり大きな工場となる予定である。そしてこの地方の町の人々の就職率を高めることにもなるであろう。

次にミルク工場があげられる。ここではオランダやスウェーデンの技術を導入して長期保存タイプのパックを作り、遠く首都ダルエスサラームまでミルクを運ぶ場合もある。他に、バター、チーズ、食用油、粉ミルク等を製造している。このミルクプロジェクトがこの地方の人々に多大な貢献をなしてきた。今まで牛を多く持っていた人々は、えさを捜す為に、どうしても山深く入り住んでいた。そこには産業らしきものが無い為、自給自足しているだけで、現金収入の道はほとんど無い。しかしミルク工場が出来、今まで子牛か自分達だけしか利用していなかった牛乳が換金物となったのであるから、その影響は多大である。

ゆえに私も何回となく山奥の人々から、ミルク収集車をこちらまでくるようにしてもらえないだろうか、と言われたことがある。しかし燃費とのかねあいや、最も大きい出費となっている車両の修理費が山奥へ入れば入るほどかさむということで、なかなか実現には至らなかった。これには雨期という大きな障害があり、いくら道路を整備しても、また次の年には道がこわれてしまうという事実があるからでもあった。これらの点を考慮すれば、もっと地方の部族へも貢献する度合いが高くなると思われる。

他にはビクトリア湖でとれる魚であるが、これもほとんどが帆かけ船で作業をしており、この地方の食生活を支えているにすぎない。漁法としては定置網や一本釣りであり、機械力を使用するまでにはいたらないようである。このことから、まだまだ改良する余地はあるのであるが、それに伴って保存設備も必要になってこよう。

農作物の面では、水さえあれば、ほとんどの作物が出来るようだ。気候的には日本の初夏的なものなので成長率も早い。私も日本から種子を持っていったので作ってみたが、乾期においても水さえまけばスイカ、ハクサイ、トウモロコシ、ニラ、トマト、豆、キュウリ、ショウガ、春菊等なんでも出来た。この点ムソマ地方は湖に面しながら、わずか100mはなれただけで砂地となり、作物が出来なくなってしまう。目の前に雄大な湖を眺

タンザニア I ……二つの任地での通算 3 年間の見聞

めてである。土地は日本の 3 倍近くあるのであるから、もう少し灌漑設備を整えたなら、より以上に農作物にも期待をかけることが出来るであろう。人間性：地方の部族全般に対していえることであるが、ほがらかで純朴である。そして私が日本で思っていたように、アフリカが発展しないのは、彼らがあまり勤勉でない為ではないだろうか、という疑問は一ぺんに吹き飛んでしまった。

もちろん日本社会からしたら実にのんびりしているかも知れないが、そうしなければ体がまいってしまう気候なのであり、その中においては実によく働いている。そして見知らぬ私が話しかけても、ものおじもせず、ていねいに、子供達が無邪気に答えてくれるのは、とても楽しかった。食事時に突然訪れても、いやな顔一つせず、私のぶんだけ彼らの食べる量が少なくなるのに、ぜひとも食べなさい、と言ってくれる時は、貧しさとは何であるかと考えさせられる。

これはイスラム文化の影響もかなり入っていると思う。明るすぎて、内面的な思いやりがほしくなる時もあるが、この乾いた大地では、そのような文化が育たなかったのもうなずけるし、また、それだからこそ、この強烈な自然の中で生活できるのである。

II 第 2 任地

任地：タンザニア国、アルーシャ州、州都アルーシャ。ここはタンザニア北部中央にあり、キリマンジャロ山及びメルー山のふもと標高 1,500 m 付近に位置する。ケニア国境にも近く、昔からナイロビ、ダルエスサラームへ行く際の中継地点としても栄えてきた。もともとは西洋人が開拓した町で、今でもその雰囲気町の中に漂う。なお現在ではタンザニア観光のメッカ、セレンゲティ自然公園やキリマンジャロ山登山の基地としても利用されており、しばしば国際会議等もこの気候の良いアルーシャの地で開かれる。

所属先：同じくミルクプラントの本部及びアルーシャ工場。これは 2 年で任期が終わる予定であるが、タンザニア側の強い要望と、私が提出した訓練所を作る案が証認された為、本部で直接活動したいということからアルーシャに転動になったものである。

期間：昭和 53 年 6 月より約 1 年間活動。本部とミルク工場をかけ持ちのかたちになる。

気候：標高が高いのとメルー山がすぐ後ろにある為、非常にしのぎやすい気候である。乾期にはかなり暑くなるのであるが、それでも汗ばむほどではない。雨期は最も寒い季節となり、オーバーが必要になる。家の中では暖炉を使用することもめずらしくなく、山の手では霜が降りる。そして空気は乾いているので、コーヒー栽培がさかんである、タンザニアの中では一等地にあたる。

部族：この地はもともと山の中であり、西洋人が切り開いて作った町である。もともとはメルー山を中心にしたメルー族の地であったが、現在ではアルーシャ族と呼ばれている。アルーシャ族とメルー族では言葉はほとんど共通である。他にキリマンジャロ山のふもとに本拠地を持つチャガ族、そしてアルーシャの西、草原地帯に住むマサイ族等より成る。マサイ族は一般に遊牧民として知られているが、遊牧をやめ町に定住している者も多い。しかしまだ一般的には他部族から見下されている面がある。

裸足で山の中を歩いたりしているから、そうみられるのだが、彼らは一家族で百頭近い牛を持っている場合もめずらしくなく、結果的に彼らは大金持ちなのである。例として私がある小さな町に用事で行った時、マサイ族の若者を二人見つけた。赤い布をまとい、髪をどろで結び、槍を持った独特なでたちの彼らが、小間物屋に入って行くのを何となく目で追っていた時、小さな環飾りを買うのに、ふところから出したお金が何と厚さ10cmもある札束であったのはおどろいてしまった。多分牛を売った帰り道なのであろうが、普通の人ではとても手に入れることの出来ない金額だ。

また一般的にマサイ族は頭が良いといわれている。現副大統領の一人もそうであるように、学問をさせたら、かなりの所までいける素質はある。現地の友人に聞いたのであるが、工業学校でいつもサッカーばかりやっていて勉強をしないマサイ族の生徒が試験の時は常にトップであったと。彼ら自身マサイは頭が良いと認めている。他にこれはアルーシャ工場のミルク収集車の運転手と一緒にマサイ地区にミルクを集めに入った時のことであるが、彼らはお金を受け取る時、字を知らないという理由から母印を押していく。しかしこの運転手は「あいつは字が書けるよ」と数人を指さして言う。しかし実際には彼らはサインをせず母印を押していった。私がこのことについて運転手に尋ねると、もしサインをしたのを誰かに見られたら、あいつは字が書けるではないか、それなら町に働きに出て現金を稼いでこい、ということになるらしいのである。またある時はマサイと町の

人が道でけんかを始めた。そのうちマサイが怒りだし、急にベラベラと英語で反論してきた時もびっくりしたということであった。つまり大学を出たけれどやっぱり遊牧の生活が良くて帰ってくる者もあるらしい。これは、日本で言われているリターン現象と似ている。

チャガ族についてはあまり良い評判はたっていない。中にはチャガ族はドロボーであるなどと言う人もある。何故そのように言われるのかといえ、ある程度のねたみからきていることも事実である。彼らは商売がうまい。ということは金持ちなのである。昔から、山登りの地として栄えたモソンの町に住む彼らは白人相手に商いのこつをおぼえていったのであろう。それにキリマンジャロ山のふもとに広がった肥えた土地は農作物の栽培に適し、近くにはアルーシャという消費地をひかえている。このことを指して、つまりタンザニアの富を一部族で手に入れているふとどき者とでも映るようである。しかしやはり頭が良いのも事実で、タンザニア人経営の店という、このチャガ族が多い。

産業：やはり世界にその名を轟かせているコーヒーであろうか。キリマンジャロコーヒーといえ、ほとんどの日本人が知っているはずである。町から少しはなれた道ぞいには、よくコーヒー畑を見かけることができる。他には大農場方式の小麥耕作も行なわれており、トラクターで真直ぐに半日掘り起こし、残りの半日で引き返してくるというふうである。しかしこの場合には雨期を利用するしか方法がない。

動物製品も作られている。しま馬の毛皮とか象牙等々。これは近くに大きな自然公園があるので、その動物を加工しているが、保護されている動物の為、量産とまではいかない。その他有名なパイプ工場、ビール工場、ミルク工場等々がある。個人経営の店も発達しており、ちょっとした物や修理は、この町で十分まかなえる。また町の中に住んでいる人達は土地を持たない為に、雨期になっても畑をたがやすことが出来ないということであった。

人間性：都会のせいか、町全体の親密感が薄いように感じられた。ムソマにいた時は町の人をほとんどを知っていたのであるが、このアルーシャの町では知らない人の方が多い。そして彼らが町の中に住む場合でも、ここいらはチャガ族が住んでいる場所、ここいらはアルーシャ族、マサイ族と分かれている場合が多い。都会になればなるほど、部族意識が高まってくるようである。

たとえばマサイ族に対するような他部族の見下しも、町に出るほど強いのであるが、それもアフリカ的な面が強く、日本的な陰湿なものではない。笑いながら、あいつはマサイだからしかたねえや、というふうなアッケラカンとしたものである。このような点が日本人にはあまり無いので非常にひかれた。先のことをあまりにも緻密に計画し実行しようとする日本人には、このもっと広い大地のようなのんびりとしたアフリカ人の心が必要なのではないだろうか。アフリカボケだと言われながらも、やはり彼らに教えられた、このような生き方を大切にしたいと思っている。

III 3年間の活動を終えて

私がタンザニアに派遣された時は、同期の隊員がはず私一人であった。今思うとやはり他に同期の隊員がいたなら、日本に帰ってからでも思い出話に花を咲かせることが出来たであろうと感じる。初めてダルエスサラーム空港に降り立ち、今は立派に舗装されている道路を、ドロをはね上げながら走った車、その中で突に異様に目に入ったのは、人でもなく風景でもなく、普通の家庭の窓枠に入っていた鉄格子であった。

そして語学研修旅行と称する国内一人旅。乞食が多いのではないかとと思ったら、あにはからんや、私に食べ物をわけてくれたり、私が席を立つとちゃんと場所と荷物を見ていてくれる。汽車の床には穴があり、枕木がビュンビュン後へ飛んで行くのが見える。彼らの主食トウモロシの食べかすをその穴から下にすてるものだから、途中にトウモロシが引っかかり客車の中にトウモロシの葉が背々と30 cm ぐらい繁っていたのには、あきれたり驚いたり。

自然公園を見に行った時には、シーズンオフで使用していない小屋を無料で借りることにした。小屋の入口の前には立派なライオンの剥製が四つ足を天に向けてドアによせかけてある。これは立派な雄のライオンの剥製だわいと思いつながら車からおりて4~5 m まで近づいた時、急にその剥製のはずのライオンが起き上がりこちらを睨むではないか。あわてたのなんの、車に飛び乗り必死で逃げた。後で気がついたら防禦用にスパナ1丁を持っていただけで、後日笑い話になった。

悲しい思い出としてはムソマで初めて友だちになった少年フレッドの死であった。ある日突然フレッドが死んだという知らせを聞き驚いたのであるが、バスに乗ろうとしずべってひかれたということであった。よく二人

で釣りに行ったりし、僕は大きくなったら学校へは行かずに家の為にパン屋さんになるよと言って笑っていた彼に2度と会えなくなってしまった。一つ心残りなのは、急がしくて彼のお墓に1本の花も持って行ってやれなかったことである。

なお生まれてはじめて戦時下で生活する機会も得た。つまりタンザニア、ウガンダ国境紛争である。私が住んでいたアルーシャはウガンダ国境から遠くはなれており、ほとんど心配はなかったのであるが、キリマンジャロ山を目印にウガンダ軍が攻めてくるという噂話が流され、煙火管制がしかれた。しかし彼らは、いたってのんびりしており、あい変わらず飲みに行ったり踊りに行ったりで、戦時下という雰囲気はほとんど感じられなかった。

おもしろいことに、ムソマで友軍のミグ19ジェット戦闘機が哨戒飛行をしている時、下の高射砲陣地では連絡が取れず、田舎のこととて電話で本部に問い合わせたとしても2~3時間はかかってしまう。結局未確認飛行物体は撃ち落とすという鉄則により3機のうち2機を撃ち落としてしまい、残るもう1機はあまりあわてたので方向をまちがえ、燃料切れでビクトリア湖に墜落してしまった。下で見ていたムソマの住民はおお喜びで機体が落ちた場所に向けつけたら、何とこれがタンザニア軍の飛行機ということであり、何となくユーモラスな感じがした。

私が一番心に残っている楽しい思い出は、やはり彼らの家に遊びに行った時のことであろう。丸いテーブルの真中に空きかんで作ったランプを置き、ウガリを並べる。それを皆で手づかみで食べながらお年よりにいろいろな話を聞くのだ。時には奴隷狩りの話も聞いたことがあった。そして私からも日本のことや、知っているかぎりの話を、ランプの灯りで壁にゆらゆらとうつる老人の影を見ながら、よく話したものである。たとえば、くじらの話等をすると、ほんとうにびっくりして他にもっと面白い話をしてくれと何度も言われる。

やがて彼らが私を呼ぶのに"mtoto yangu"と言ってくれるようになった。つまり親愛の情をこめて、私の息子よ、と言うわけである。冗談まじりに、ここで結婚して子供を作ったらどうだ、と言われたことも、しばしばあった。もしお前がいやならわしが子供はいくらでも預かってやる。それが女の子だったらなおさらのことだ。結婚する時には色が白く髪が長い娘だったら良い所にお嫁さんに行けるし、その時の結納金はさぞたくさ

んもらえることだろう。もしかしたら牛 100 頭ぐらいはもらえるかも知れんぞ、と笑って言う。つくづく、年よりとはいいいもんだなあ、と思う。あせりも無く、見栄も無く自分が経験してきたことをぼつりぼつりと我々若者を諭すように話し、また若者の言うこともウンウンとうなずきながら聞いてくれる。どこかしら雄大な暖かみを感じずにはおれない。そして、この老人達は非常に明るく、また皆から常に敬意をもって呼ばれるのである。

泥で塗り固められた壁に日射しがまぶしい。

イスを出しババイヤの木影に老人達と座る。

遠くには雄大なビクトリア湖を望み。

時おり乾ききった赤土を少しだけ舞い上がらせて風が通りぬける。

思い出したようにニワトリが鳴く。

かすかに太鼓の音も聞こえる。

だれかが地酒を飲み踊ってでもいるのであろうか。

この時、となりに座っていた老人がぼつりとつぶやく。

何故我々は色が黒いのだろう。

何故お前のように髪が長くないのだろう。

どこからか、お前はアフリカ人ではないぞ、という声が聞こえたような気がする。

しかし、この時の無い大地、目のくらむような太陽はしんと静まりかえっている。

そして次の瞬間には何事も無かったように。

まるで生まれた時からここにいたかのごとく。

静止しきった一枚の風景の中にいる私。

どこまでも続く大地。

青く輝くビクトリア湖。

まるで黒くなってしまふほど、すきとおった空。

静かな、時の無いアフリカの昼下がりに。

今は遠い私の思い出である。私がタンザニアに着いた時間いた言葉がある。それは任期が無事終了し帰国する。その時機上の人となって遠ざかるタンザニア大陸を見ながら種々あった出来事を思い出し、もう 2 度とこんな国へは来たくないと思う人と、とてもすばらしかった、何とかして、ぜひ再びこの地を訪れたいと思う人とに分れるそうである。幸いなことに私は後

タンザニア I ……二つの任地での通算3年間の見聞

者になることが出来た。あの人なつこい小学生フレッドのように死んでしまったのなら2度と会うことは出来ないであろうが、私達は互いに今生きているのである。たとえ日本とアフリカという距離のへだたりはあるにしても、生きていればこそ、また会う機会もあると信ずる。しかし現在の彼らには国外旅行をする余裕もなければ、その気も起こらないのではないだろうか。今のままで十分幸福なのであるから。

私がいた3年間は、彼らにしてみれば人生のほんの一部である。やがては、そうだこんな日本人がいたっけ、という小さな思い出としか残らないかもしれない。しかしあの別れの時に彼らが私に言った言葉"息子よ、なぜ、お前は帰ってしまうんだ""なぜ、このすばらしいタンザニアの地に留まらないんだ"に対する返事として、私はどうしても"また来ますよ。けっしてタンザニアがきらいになったわけではないんです。おじいさんが生きている間にならざるもどって来ます"と言わざるをえなかった。彼らの思いやりを思い出すのである。その時はじめて彼らは笑い、もし結婚していたら子供をつれてこいよ、もし結婚していなかったら、いくらでもさがしてやるからな、と言ってくれた。

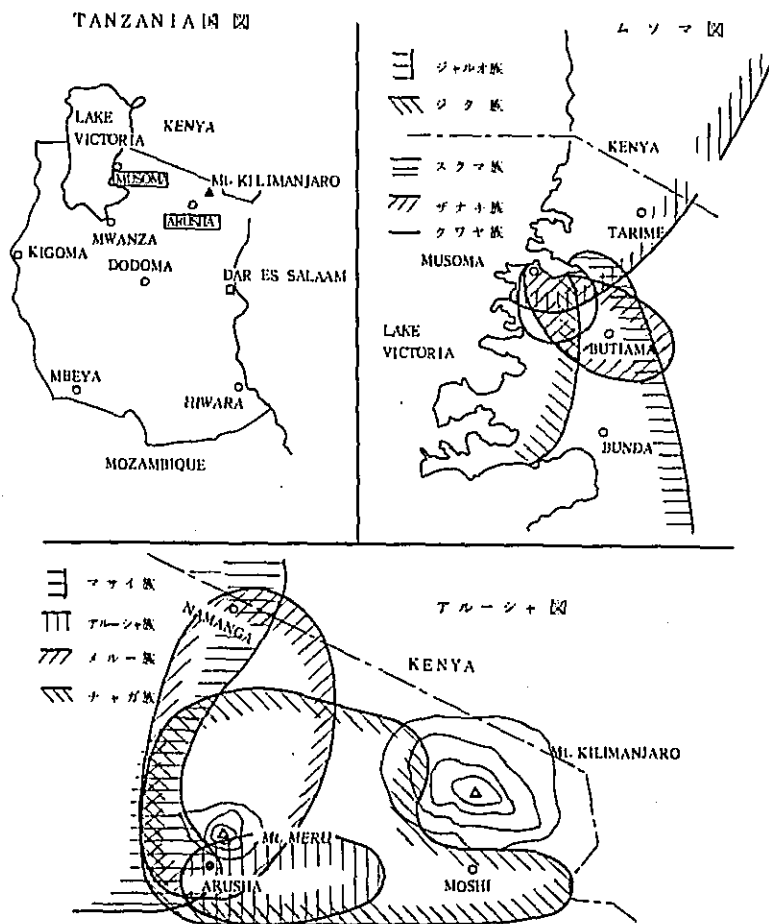
彼らの信頼に対し、そして私が言った、また来ます、という責任にも応えて、今後機会を見つけて、またあのすばらしいアフリカの大地に立ちたいと考えている。我が青春を燃焼させた地に。

なお次に私が協力活動したムソマ地区とアルーシャ地区の位置、及び各地区におけるおおまかな部族構成を図表にして示す。

最後に私がTanzania Dairies Ltd. アルーシャ工場及び本部で短期講習用のスワヒリ語によるテキストを作成したので参考までに添附する。

(注=割愛)

ムソマ及びアルーシャ地区における部族構成図



日本に帰って考えること

小 滝 勝 信

タンザニアを離れて1年近くになろうとしている。今あのタンザニアでの3年間を振り返ってみると、雄大なアフリカの大地に対して少しの変化もおこせなかったばかりか、行く前とちっとも変わっていないような気持ちにとられる。もちろん世の中は絶えず変化しているのであろうが、先進国の技術力へアフリカが急速に近づくほど発展しているとも思われない。アフリカ発展の一端でも担えれば、と考えていた私自身、彼らのレベルに引きずり込まれ、そしてその中で多少なりとも努力しただけのことである。

考えようによっては、タンザニアの田舎町、そのまた小さな人間集団、その中のほんの一握りの人々に感謝された自己満足にすぎなかったかもしれない。でもその自己満足さえも出来ない日本人がいかに多いかを考える時、私は後悔感を持たないであろう。もちろん技術面での個人的な衰えは否めない。しかしそれらにまさる人間の幸福感や心について、絶対に日本では教えてもらうことの出来ない考え方を学んだような気がする。技術力の遅れなど、帰国後真剣に勉強したならば必ず取り戻すことが出来るのだから。

アフリカ社会という全く未知の世界で協力活動を成功させるということは、いかに日本人臭さを捨てられるかということと同じかもしれない。そして高度な技術の押し付けよりは、むしろ今まで何百年と培われてきた彼らの伝統技術を見直す事から始まるのではないだろうか。それらの中に、いかにその土地々々の実状に合った合理性が含まれているかということ。これをもっと具体的に言い換えれば、彼らの立場、彼らのレベルで物事を考える、つまりタンザニア人的になり、その中から改善出来る事柄や不都合な部分を見つけ出し、そこへ自分が持って来た新しい技術をはめ込んでいくというやり方である。

着任当時地方にいた先輩隊員の家泊まりに行き驚いたことがあった。夜寝静まってから誰かの話し声で目を覚すのだが、誰も来た様子がない。しばらくたって、また声があるので、てっきり泥棒でも来たと思い起きあがって調べたところ、何とそれが先輩隊員のスワヒリ語での寝言だった。私の経験としては

2年目近くなって朝目が覚める瞬間、あれ、いつ日本に帰ってきたんだろう、と思うことがしばしばあった。窓の外では小鳥がさえずり、カーテンの隙間からは朝日がきらめく。まぎれもなく見なれた自分の室だしと、ぼんやりベッドの中で1～2分考えているうち、ああまだアフリカにいたんだっけ、と気がつくのである。

また私が初めて首都から山奥の自分の任地へ3日もかかって到着した時、バス停がかなりの人で賑わっていた。これはバスを出迎えに来た人々なのだろうか、と眺めていると、そうでもないらしい。ただぶらぶらしながら人の集まるバス停で、こんどはどんな人間がやって来たのかと眺めているだけなのである。日本から来たばかりの私にとってはこの光景が非常に奇異に感じられた。それから1年以上もたった頃であろうか、ある日、ふと我に気がつき、まわりを見回すと、口をあけ手持無沙汰にバスの出入を眺めている群れの中に自分がいるのを発見したのである。

私はこれが決して良い姿であるとは思っていない。しかし協力隊員であったからここまで出来、それゆえ一般の日本人では接することの出来ない山奥の部族や労働者と知りあい、そして語り、たとえ表面的だったにしろ、彼らの為に何かしてやりたいと考え、かつ行動できたのだと思う。

同じように一旦日本に帰って来たならば、やはり日本社会のルールにしたがわなければならない。それはアフリカにおいて日本人であることを忘れたように、日本においてはアフリカの生活を忘れることが早く社会復帰する条件のようである。哀しいことであるが、これも現実である。アフリカにいる時私はアフリカ人になりきったつもりでいた。しかし体のどこかしらに日本人が息づいており、それを完全に追い出すことはとうとう出来なかった。たとえば広大な土地も人々も実にすばらしいと思う反面、もの足りなさを感じたのである。それは私に日本が持っている良い面を逆に認識させてくれることにもなった。

帰国した今、私は彼らをまったく対等な人々として見ることが出来るし、どんなことでも努力しだいでどうにかなるものである、という自信が出来たような気もする。そして、この日本社会の年功序列の中においてさえも、アフリカで生活した貴重な3年間は決して無駄ではなかったと思うのである。



全国の各工場から派遣されて来た整備士に、手製の教科書を使って、初めて実施した講習風景。非常に熱心で、またやって欲しいという声が高かった



突き臼で近所の娘と主食トウモロコシの皮を取り除く作業をしているところ

小滝隊員の報告書を読んで

上 川 修 二

小滝隊員の報告書を読み終えて、まず感じたことは“タンザニアについて、地理、産業、部族、人間性等を、これだけ克明に記した書物は無いのではないか”ということである。

これだけのことを調べるにはタンザニア人の中に融け込んで仕事をしたことが推察される。技術協力という、ややもすると優越感を持ってボランティア精神から逸脱する者もいるが、彼の場合は、気負いもなく、極く自然にタンザニア人との付き合いが行なわれたことがよく現われている。自動車整備の仕事については、あまり記されていないが、タンザニア人と共に仕事をしてよい成果をあげたものと確信する次第である。特にアルーシャの老人からお嫁さんの世話をされそうになったり、任期を終り飛び立つ際に引き止められたこと等で証明されるのではないか。（青年海外協力隊技術専門委員＝自動車整備）

MBEYA州の畜産の現状と私見

最終報告書

派遣国 タンザニア 51年1次後期組

職 種 獣医師

氏 名 南 繁

配属先 Ministry of Agriculture,
Livestock Development Division,
District Livestock Development Office,
MBEYA

南隊員の略歴

氏 名 南 繁

生年月日 昭和24年3月11日

出身県 大阪府

職 種 獣医師

派遣期間 51年10月～53年10月

MBEYA州は六つの地方に分れ、それぞれ自然条件が非常に異なっている。まず一つずつ簡単に説明してみると、

1. MBEYA DISTRICT

州の中心地である町は標高1,744 mの山麓にひろがり、人口約5万人。町近辺は緑が多いがそのほとんどはサバンナ地帯である。雨期11月～5月（町近辺）、1月～3月（Usungu Plain）

2. CHUNYA DISTRICT

広大なサバンナ地帯。雨期1～3月、乾期は常に水不足に悩まされる地方である。

3. MBOZI DISTRICT

標高約1,800 mの山がちな所であり、コーヒーの栽培が行なわれている。雨期11月～5月。

4. ILEJE DISTRICT

MBOZIとCHUNYAの中間である。

5. RUNGWE DISTRICT

雨が多く1年中緑におおわれている。紅茶栽培が盛んで人口も多く、土地も非常に良質である。

6. KYELA DISTRICT

標高400 m、マラウイ湖の湖岸にあり、熱帯湖沼性気候である。1年中雨が多く暑い。米作が盛んである。

この様にそれぞれが非常に異なる為に病気や飼育方法も異なっているが、大体の所を紹介してみよう。

I 牛

① 酪 農

搾乳を行なっているのはDairy Farm CooperationのKITULO、IWAMBI、両ファームと、UYOLE AGRICULTURE CENTER（農業省による）、MBARALI FARM（中国の協力で作ったNAFCOのFarm）、二つのUjamaa村と2、3の個人FARMで、一般の人々は搾乳をしても売るところまではいっていない。その他、軍隊でも自給自足の為の乳牛が飼われている。

イ. KITULO FARM (DAFCO)

標高2600 mに位置する400haの広大なFARMで世界銀行からの援助

で作られた。600頭の乳牛を飼養し400頭から搾乳している。現在第1、第2 Milking stationがある。将来は第6まで増やし、頭数も最低2万頭にする予定である。牛乳は毎日75kmの道のりをUYOLEや冷凍工場まで運ばれている。

ロ. IWAMBI FARM (DAFCO)

MBEYA市の郊外6kmにあり、570頭のうち200頭から搾乳している。冷凍工場へ出荷している。

ハ. UYOLE AGRICULTURE CENTER

607頭の乳牛を飼い、ヨーロッパ、特に北欧からの協力で近代設備を整え、試験場と教育の場を兼ねている。

(MBEYA DISTRICT)

ニ. MBARALI NAFCO FARM

206頭の乳牛を飼育している。生産した牛乳は、農場で働く人によって消費され、出荷はしていない。(MBEYA DISTRICT)

ホ. WAMBIRO UJAMAA

19頭の乳牛を飼っているが、慣れていない為事故が多い、搾乳量も少なく、タンザニアで現在酪農をしているUJAMAAの姿と言える。

(MBEYA DISTRICT)

ヘ. ISANSA UJAMAA

UJAMAAにしては順調に18頭の牛を飼っているが、乾期は水不足に悩まされ、牛乳カンすら洗う水が無く、搾った牛乳はすぐに固まるし、町から遠い為、せっかくの牛乳が売れない。

(MBOZI DISTRICT)

ト. 個人のFARM

白人やインド人、アラブ人が経営しており、政府経営とは比較にならないほど良い管理をしている。

チ. その他のFARM

軍隊や学校、刑務所で、それぞれこの国の目標である自給自足の為に乳牛を飼っているが、そのほとんどが飼育方法を知らず、事故が絶えない。

MBEYA州全体で約2200頭の乳牛が飼われ、多い所で1頭から3000kgを1年で搾乳している。

② 肉 牛

民間で行なわれているのは、ゼブーを飼い、微量のミルクを搾り、肉として売る事である。MBEYA全体では約60万頭いると言われているが、信用の出来る数ではない。

それに州の中央及び北部ではほとんどが遊牧であり、飼養しているのは、スクマ族、マサイ族が多い。彼らは少なくとも500頭、多い者で5,000頭の牛を持ち、草と水を求めて移動している。各地方では一定の日に牛市が開かれ、1頭600～1,200 シリングで取り引きされる。

③ 品種改良

イ. 人工授精

KITULO, UYOLEで行なわれており、近年中にIWAMBIでも始める予定である。ストロー及びアンプルはヨーロッパやアメリカから来ており、日本のものとはサイズが違っている。液体チッ素の供給があてにならないのと、牛群を管理している者が発情を見つける事が出来ないなど難点が多く、受胎率も非常に悪い。

KITULOでは獣医師、他所では欧米で学んだ授精師がこの仕事に当たっているが、繁殖障害の治療薬もなく、私には、ここに合った方法とは思えない。この程度の乳量で繁殖障害など考えられないのだが、これはほとんどが政府経営であり、管理するものに対しても余り責任を問わないこの国の体質にある。まだまだ繁殖障害治療のようなキメの細かい仕事は無理である。

ロ. 種牛センター

民間の牛と交配する為に種牛を配置している場所で RUNGWE 10, KYELA 4, MBOZI 2, MBEYA 2, ILEJE 1, 計19ヶ所あるが、その内11ヶ所が何らかの原因で使用出来ない。主にフリージアンとジャージーを置き、畜主が発情を見つけたら連れて来て交配させるのである。もちろん政府の管理なので無料だが、余り活用されているとは言えない。というのはオフィス側の宣伝不足、及び地域住民の質がかなり影響する。

まず品種改良して少しでも多くのミルクを得ようとする意欲が大事でこれは当然、町周辺の住民の方が多く持っている。それと発情発見が大事で、普通牝牝混合で飼われている為に、連れて行く前にその牝に交配されてしまう場合が多いのである。RUNGWEの2、3ヶ所は結構使わ

れているようであるが、他の所は飼っているだけというのが多い。

1977年度に24頭の種牛が、217頭と交配され、111頭の仔が得られた。今年7月に建てられた所では、形の変った牛がいるという事で動物園のように見物に来るだけで、使いだすのは2年位先であろうとの事だった。いかにもタンザニアらしい状況である。もっともっと説明する必要がある。

④ 飼 料

FARMでは乾草が作られ、グラスサイレージも作って乾期に備えているが、一般には毎日水と草を追い求める方法で、牛は雨期には肥え、乾期には瘦せてガリガリになる。今も昔も全く変わらない方法である。濃厚飼料はNational Mealing Cooperationが扱っており、買えない事はないが、その供給がいかげんで、有る時と無い時との差がひどい。これもこの国の一番の問題である輸送手段が確保されていないからで、F.A.R.M.のマネージャーはいつもこの問題に頭を痛めている。

⑤ 疾 病

何といっても大きいのはTick Feverで、East Coast FeverとAnaplosmosis以外はほぼ無きに等しい。一応この2年で経験した疾病を以下に記す。

1. E. C. F. 2. アナプラズマ 3. トリパノゾーマ 4. パベシア
5. 出血性敗血症 6. 炭 疽 7. ブルセラ 8. 口蹄疫 9. ブラックオクター
10. 狂犬病 11. 心水病 12. コクシジウム 13. ビンクアイ 14. 結 核

以上が伝染するものであるが、その他一般的な病気として、

- (1) 肺 炎 (2) 骨 折 (3) 脱 臼 (4) 中 毒 (5) 跛 行 症 (6) 創 傷 性 胃 炎 (7) 乳 熱 (8) 蹄 底 腐 爛 (趾 間 を 含 む) (9) 毒 蛇 咬 傷
- (10) 高山病 (11) 関節炎

注. (10)の高山病はKITULO FARMで多発したが、原因はアメリカから来た牛をすぐに運び込んだ為で、今はIWAMBI FARMでワンクッションおく為無くなった。非常に珍しい病気であった。

⑥ 予 防

イ. 薬 浴

ダニを防ぐため各地に薬浴槽が設けられ、それぞれ管理人がおり、週に2回行っているが、牛の数に比べて少な過ぎ、その週辺の一部の畜主

にしか恩恵が与えられていない。また管理が非常に杜撰であり、替水をせず、薬液を足しているだけというのが多い。さらに水の不足という事もあり、濃度検査はやっているものの、検査自体がいいかげんである。毎週2回薬浴させていたにもかかわらず、Tick Feverに感染した例が多く見られた。病気の9割以上がTick Feverであり、その予防はこの方法しか現在考えられないのに、今は結局、気休め程度でしかないのは残念である。

余 談

注. DAFCOのIWAMBI FARMでは毎雨期かなりの数の乳牛がダニ熱によって死亡する。ここは設備が整っており、週2回必ず薬浴を行なっている。フリージアンはゼブーよりダニに対して抵抗力がない。皮フが柔らかい事もあるが、15 km離れたUYOLEでは全く発生を見ず、困り果てている。

今までにも薬浴回数を増やしたり、薬液の濃度を増したり、種類を変えたりしてきたらしいが、どうも阻止出来ない。私なりに種々アドバイスしてきたがだめだった。こういう場合細かい調査と熱心な管理が要求されるが、ここでは精々獣医師とマネージャーが熱心なだけで、それ以外は全くアテに出来ず、つくづく無力感を感じた。

ロ. ワクチン接種

MBEYAで使われているのは炭疽、ブラックオーターの混合ワクチン、ブルセラ、F. M. D., 出血性敗血症の4種類であり、リンダーベストは行なわれない。ワクチンの絶対量が少なく、政府関係の牛しか接種されず、一般にはほとんどまわらない。また輸送時の冷蔵がいいかげんな為、はたして効果があるのかも疑わしい。これも気休めという所であろう。

⑦ 畜産品

イ. ミルク

牛乳の需用は非常に高く、現在のところ全く足りない。ミルク工場は今建設中で、UYOLEの牛乳が市場で量り売りされている。1リッターが約2 シリング。DAFCOの牛乳は総て冷凍工場へ入荷されている。その他ウジャマーや小農場で売られている。

ロ、バター

UYOLEで生産されているが、値段の点でなじみが薄く、外国人とインド人が買うのみである。一般にはマーガリンが稍一杯である。

ハ、チーズ

私営ファームで生産しているが、現地人の嗜好には合わないようだ。値もずいぶん高い。

ニ、生肉

M B E Y A 屠場では毎日40頭ほどが屠殺される。給料日のあとでは屠殺数も増える。現在は一応足りているように思える。冷蔵庫が無いので保存がきかず、人殺を見て、次の日の屠殺数を決めているようだ。

ホ、皮革

牛とヤギの皮を乾燥させ、フルーシャの皮革工場に送っている。

ヘ、食品加工

現在M B E Y A 郊外にタンガニカ・パッカーズの工場を建設中で、主にザンビア、ザイルへの輸出を目的としているらしい。完成すれば1日100頭以上の屠殺が行なわれる予定である。骨粉や血粉などの利用は全くされておらず、惜しいように思うが、肉を売る時に骨ごと売る為、それらの利用ができないのであろう。工場の完成が待ちどろしい。

II 豚

養豚は最近当地で脚光を浴びているもので、近代的な設備が整っている所として、UYOLEとMBARALIがある。前者ではヨーロッパ・システムで主にランドレース、ラージホワイトが飼われており、後者では中国システムで飼われている。どちらも、これがタンザニアかと思うほどの設備である。その他政府機関や学校でも盛んで数は増える一方である。一般には在来種が飼育されている。この養豚ブームの背景として主に次のようなものがあげられる。

- (1) 政府の自給自足の方針で各所では何らかの家畜を飼わねばならないが牛に比して手間がかからず増えるのが早い。
- (2) イスラム教徒の多い海岸地帯から遠く離れている為にキリスト教徒が多い。
- (3) 乾期でもここの人々の主食であるトウモロコシを粉にする際に出来るクズを与えられる。

- (4) 肉値が牛肉に比べて5割高く、その価格が政府に保証されている。
- (5) MBEYA, RUNGWE DISTRICTは人口が多く、豚肉は不足している。
- (6) 牛だと子供がずっと一日中草と水を追っていなければならないが、豚だと老人でよく、子供を学校にやる事が出来る。

これからブームはまだ続くと思われる。タンガニーカ・パッカーズの工場が完成すれば、なおさらである。ここでもう少し詳しく各部門の事を書いてみる。

① 品種改良

民間で飼われているものは、在来種で産仔数も少なく(4~6頭)、成長も遅い。そこでUYOLEなどから牡豚を買って改良する事を勧めてはいるのだが、UYOLE A. C. は政府の機関である為、軍隊や学校の要請を重要視し民間までは現在のところとてもまわってこない。

いずれ時間が解決してくれるものと思うが、まだまだ先の話である。肉質はダルエスサラームのような都会だとロースはロースとして売ってはいいるが、当地では脂肪も骨付も内臓も皮も総て同価格なので、全く問題にされていない。今はとにかく産仔数と成長の早さが主目標である。

② 飼料

主に使われているのは、ここの主食であるトウモロコシを製粉したあとのカスである。これは数年前まではほとんど棄てられていたもので、これが使えるというのが製粉所の多い町周辺で養豚が盛んになりつつある理由である。しかし、これは蛋白質が少ない為成長が遅れる。そこで綿の実から油を取ったカスをもっと増やすように勧めているのだが、National Mealing Coop. で買わねばならない為、余り使われていない。その他ミネラルなどは忘れた頃に入ったりするが、無いと思った方がよい。

③ 疾病

ほとんどが寄生虫(回虫が多い)症で、これさえ解決すれば大丈夫と思われる。一応経験した(分った)疾病を書く。

- (1) 回虫症 (2) 炭疽 (3) 皮膚炎 (4) 中毒

もっとあるのだが試験場の設備も乏しく、分らないものが多かった。ワクチン接種や予防はほとんど行なわれていない。

④ 肉

MBEYA屠場では毎日4、5頭が屠殺されている。給料日後や祭日だともっと数が増える。皮もロースも骨付きも同価格であるが、大都市では、

分け始めていると聞く。

Ⅲ 馬

首相ソコイネの思いつきで全く現状を知らずにただスペアパーツと燃料のいらない輸送手段として一昨年より輸入が始まった。現地の人間は馬など見た事もなく、ただ恐ろしがるばかりで、とても使える状態になるにはほど遠い。MOROGOROのDar es Salaam大学で飼われた26頭は、African horse sicknessで全頭斃死した。今、病気はひろがりつつあり、薬もワク場も無く、捕える人間も無く、ただ全頭病死するのを待つのみである。馬はMBEYAのIWAMBI FARMにもいるが、誰も扱えず、繁殖させて仔を使うと言っているものの去勢馬ばかりで、全くお話にならない。

Ⅳ 鶏

私は養鶏に関しては素人に近く、表現もあいまいになってしまうが、大体分かることを書いてみる。タンザニアの人々が最も望むのが養鶏でありうまくゆけば非常に利益もあがるので、クリニックへくる人々の約半数以上が鶏関係者である。

① 品 種

イタリアやイスラエルから輸入されている大型種で赤玉を産む。当地では人々の好みで赤玉でないや玉子でないように言われてきたが、最近玉子数の不足から、白玉でもいいという声が上がってきている。

② 飼 育 方 法

一般には原始的に外をうろつきエサを得る方法だが、少し数が増えると小屋での平飼いが行なわれている。その為に寄生虫が非常に蔓延しやすい。ケージシステムはタンザニアの一部で行なわれている。最近、MBEYAのNational Serviceで買い入れたが、価格が日本では信じられないほど高く、とても経済的に合わない。

③ 疾病と予防

コクシジウムと鶏回虫症がほとんどを占める。これがまず一番の問題である。

(1) コクシジウム (2) 鶏回虫症 (3) ニューカッスル (4) 鶏チフス
(5) 白血病 (6) マレック病 (7) コリーザ (8) 鶏痘 (9) C.R.D.
以上が多く発見されるが、まだまだ病名の判明しないものも多い。予防

は主として、ニューカッスルのワクチネーションとコクシジウムに対してサルファ剤が使用されているが、ニューカッスルのワクチンは少なくとも500羽分が1本に入っており、100羽以上飼っている人が少ない当地では、出来るだけ人を集めて目を決め投与しているが、大抵は半分以上棄てる事になる。

また鶏痘用のワクチンは値が高く使いづらい。そして、これらのワクチンは到着時すでに有効期限があと1〜2ヶ月というものが多く、ほとんどが棄てられる状態である。仕事のやり方がずさんなのに有効期限が1日でも過ぎれば惜し気もなく棄ててしまうのは、私の目から見て奇異に映る。

最近コクシジウム用のアンカリスは手に入るようになってきた。話を聞くとかなり以前からこればかり使われており、正確な量を投与していればよいが、つつい少量になりがちなので、かなり耐性が出来ているのではないかと思われる。

回虫用のピペラジンは非常に入手しやすく、それに代用する薬品も無く、一時期店に出てもすぐ売り切れる。

④ 玉子と鶏肉

玉子は他の物価に比べて高く、1個1シリングが相場でまた鶏肉も一羽最低で30シリング、普通で40〜50シリングもする。この点が養鶏希望者が殺到する理由であろうと思われる。需要と供給の関係はまだ品不足の状態、うまく飼養すればかなりの利益はあがると思われる。

⑤ ひよこ

現在のひよこの価格はプロイラー5シリング、産卵鶏6シリングであり、今まではすべてダルエスサラームより飛行機（現在空路はなし）汽車、自動車運ばれて来た。海岸地で常夏のダルエスと高原のMBEYAとでは気候に大きな違いがあり、到着して3日以内に95%が死亡した事も珍しくなかった。またその供給量も限られており、各地からの希望が多い為に注文の半分も手に入ればいい方で、こちらのオフィスでは予約帳を作り、あてがってきたが、半年以上待たされる事も当たり前という状態であった。

MBEYAで孵卵器を備えている所はMBARALI FARM、UYOLE Agriculture Center、ローマ教会の3ヶ所である。そこでは自分の所の使用で一杯で、とても一般にまではまわらない。そこで、鄰国間際申請していた孵卵器1,500個用が届いたが、電圧が違った為、まだ動いていない。トランスが到着すれば2月には始める事が出来るだろう。ひよこ

の時のストレスが一生の産卵数に影響する鶏にとって、MBEYA で飼われる事は非常に大きな意味を持ち、現在の悪い状態を打破するのを助けてくれるに違いない。一般の人々からもオフィスからも大きな期待が寄せられている。

⑥ 飼 料

政府はもっともっと家畜を増やせと言うが、その飼料を供給する National Mealing Coop. がなっていない。輸送手段がはっきり確定しておらず、トラックの調子のいい時はいいが、少しでも故障すると全く供給が止ってしまう。倉庫も小さく飼うだけ飼わせておいてエサが足らずに餓せてしまう事も珍らしくない。また配達を全くやらないので、少しでも離れた所で飼い始めた人は大変である。

こういう事から自然のエサがまだ有る雨期はいいが、乾期には産卵量がガクンと落ちる。78年度前半の輸入規制をゆるめた事により入った少しのローリーが正常に動いてくれる事を祈るのみである。

V 小動物（主に犬、猫）

畜産という題目からは少々離れるが、これも仕事のうちであるので書いてみたい。

猫の数ははっきり判らないが、犬は相当の数が飼われているようである。主な仕事は狂犬病のワクチン接種と週1度の薬浴（ダニ駆除の為）、それに治療である。犬の飼われている目的は愛玩はまれで、ほとんどが番犬である。それ故可愛いがるという事が少なく、また異常に現地の人々が恐れる事から、咬まれる人が絶えない。

1977年は狂犬病で多数の人が死亡した。78年はコレラ騒ぎの為に新聞に載る事は少ないが、減少するはずが無く、かなりの犠牲者が出ていると思う。ワクチンは年に1回すれば良いという物で10頭分が1本に入っている。液と混合すると2～3時間でダメになる為に、薬浴で犬が集まる土曜日に来てきたが、ただでさえ少ないワクチンの無駄をふせぐ為に10頭の希望が集まるまで行わず、せっかく7～8頭集まってもまた来週と煽られる事が多く、そのうちに畜主の根が切れてやめてしまう事が多い。非常にまずいやり方なのだが、ワクチン量の何10倍という犬の数から考えると、やむをえない事である。

年1回、約2週間の狂犬病キャンペーンを実施するのだが、PR不足の

タンザニアII……MBEYA州の畜産の現状と私見

為か、時々5～600頭を接種出来る程度である。治療としては主に寄生虫病が多く、約80%をしめる。

他の疾病では簡単に診断を下せるものは問題は無かったが、複雑なものでは対症療法薬も無く、検査器具も無い為、死亡する事がしばしばだった。主な病名を書くと、

- (1) 回虫症 (2) 犬鉤虫症 (3) 条虫症 (4)バベシア病 (5) ポリープ
(6) 皮フ病 (7) 結核 (8) 骨折 (9) 脱臼 (10) ジステンパー様疾患 (11) 狂犬病 (12) 中毒

その他、瘰癧を伴った進行性麻痺などがあり、トキソプラズマを疑ったが、はっきりと診断を下せなかった。去勢や卵割手術の依頼も数件あった。なお持参した薬品ではプレドニゾンが特に役立ったが、強心剤、強肝剤 パンラミンなども現地では手に入らないので、携行した方がいいと思う。大動物用の薬品は、いくら持って行ってもきりがなく、現地にあるもので治療すべきだ。

印象に残った二つの言葉

南 繁

帰国してから約1年半、タンザニアの友人に手紙を書くのにそろそろスワヒリ語の辞書が必要になり始めた。去年は何を見てもすぐに日本語とスワヒリ語の単語が同時に浮んだものだったのに。それと共に苦しかった事や嫌だった事が、私の中でなつかしさと相俟って、タンザニアは良かったという思いに変わりつつある。

北海道の酪農地帯で臨床獣医をしていた私は、以前からアフリカの大地で、それも家畜の数の多いタンザニアで、精一杯働きたいと思っていた。念願の合格、希望で胸をふくらませて上京、訓練中に、OBの方の話を聞いたり映画を見る度に俺もやるぞと血が湧きたつを感じたものだった。そして感激のアフリカの大地、この2年がんばるぞと任地へ向った。

ところが、いざ現地に着くと仕事がほとんど無いに等しいのである。毎日あるのは僅かな数のペットの診療のみ、くる日もくる日も机に座って時間つぶしのスワヒリ語の勉強だけ、こんなはずじゃなかった、家畜もいっぱいいるし、病気もいっぱいあるのに一体これはどうした事だろう。私は焦り悩んだ。隊員一人を送り出すには、莫大な費用がかかっている。そんなに多くの税金を使って自分はこんな事をしていていいのだろうか。こうしている間にも時間はどんどん過ぎてしまう。

やがて焦りは不平不満になり、それが隊員同士出会うと相乗作用で増していった。全体会議が開かれそこでは「契約では家が用意されているはずなのに、実際にはない」「訓練中に聞いた職場と全く違う」「一体事務局は何をしているんだ、もっと詳しく調査し交渉すべきだ」など様々な意見が出た。その時、もう5年も働いているIさんが言った。「だから、俺達が必要なんだよ、この国が契約通り職場も家もちゃんと用意出来るのなら、俺達はいらないんだ、それが出来ない国だから俺達が来てるんじゃないか、それが出来るようになったら、即荷物をまとめて帰るべきなんだ」。この言葉で私は目の前にかかっていたもやもやがすっかり晴れたような気がした。不平不満をいくら言っても、

気分は良くならない、じっくり自分の周囲を見つめて今の自分に出来る事は何か、それを探してゆくべきだと今思う。

2年間の隊員生活は自分のものなのだから、もっと大切に生きておかなければならない。もう一つの言葉は最近帰ってきたTさんから聞いたのだが、Tさんの隊員時代はまるでスーパーマン、何から何まで思いつく事は何でも実行し、教えかつ学び大人からは信頼され子供達の人気ナンバーワン、隊員の間でも本当に良くがんばっているなあと感心されていた人である。

その人が帰り際、タンザニアの友人に自分は長い間ここにいたけれど何も出来なかった。種々なものに手をつけたけど結局何も出来なかったと言ったら、友人が言ったそうである。「貴方は自分をどう思っているのか、人間一人でなんか何も出来ないんだよ、それより違う国の人間が長い間こうして仲良く一緒に暮らした、この事が一番大事なのではないだろうか、ここを貴方の故郷だと思って、また帰っておいで」。残念ながら私の隊員時代はここまで深く現地の友人と話が出来なかった。これはやはりTさんの努力の結果だろう。この様に向うの人は隊員にそんなに期待していないし、又ある意味では大きな期待を寄せているのである。

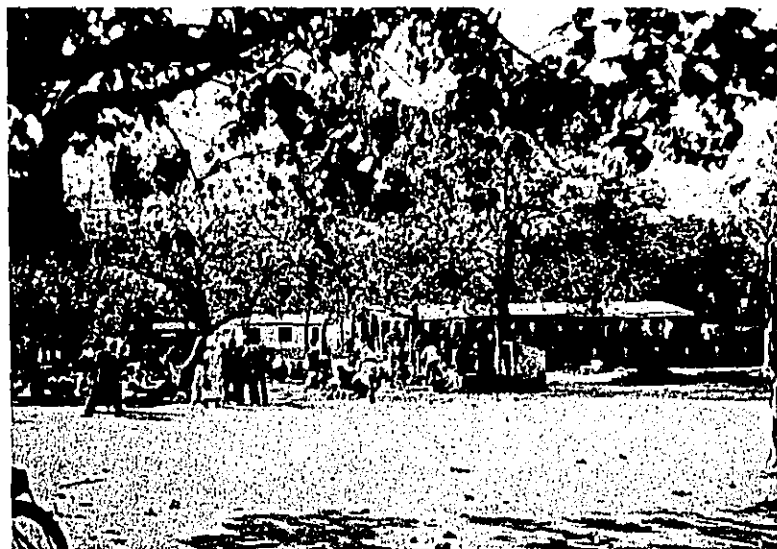
だからそんなに肩に力を入れず、もっと何でも吸収してやろうという柔軟な姿勢を持続させる事が必要なのではないだろうか。力強く枝を張った木は強風で折れるが、柳は折れない、私も柳の様になりたいと思う。

最後に、みやげ話をする時に気が付いたのだが、私はタンザニアと言っても一地方の狭い所しか知らないし、そこで見たり聞いたりした事を話すと、聞く人はそれがタンザニア全体、ひいては東アフリカからアフリカ全体がそうなんだと思ってしまう。これは大変な間違いで、私は私が見聞きした事を私なりに解釈して話しているのである。もしも他の人が同じ事を見ても異なった表現をするかも知れない。

だから私のレポートを見てもこれが総てだとは決して考えないで欲しい。異なった世界を理解するには、もっと多面的にゆっくりと時間をかけてとらえるべきで、急いで判断しようと思えばきっと間違えるに違いないから。隊員として職場に恵まれなかった時、こんな所にもう隊員は必要ないと考えずに、もしも違う人が来たら何か出来るかも知れないと考えて、小さな可能性に賭ける価値はあると思う。泥棒が多く、物騒だし嫌な事も多かったけど、やっぱり行って良かったと、今は思っている。



MBEYA 全 景



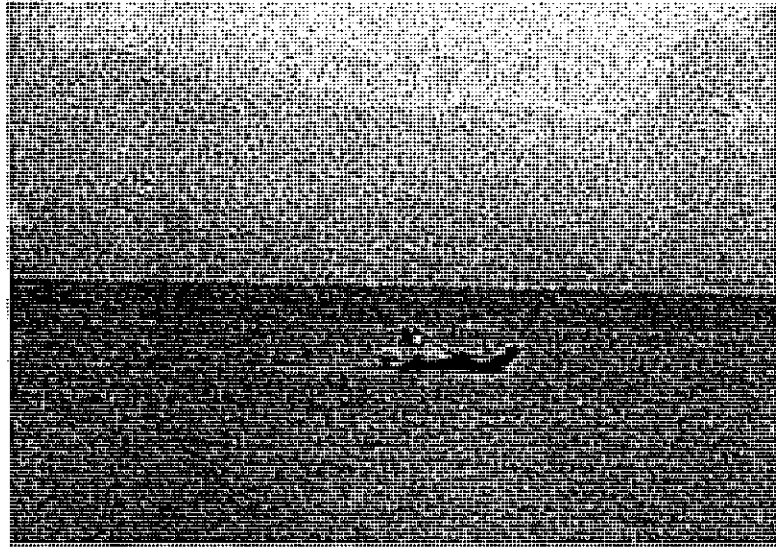
市 場



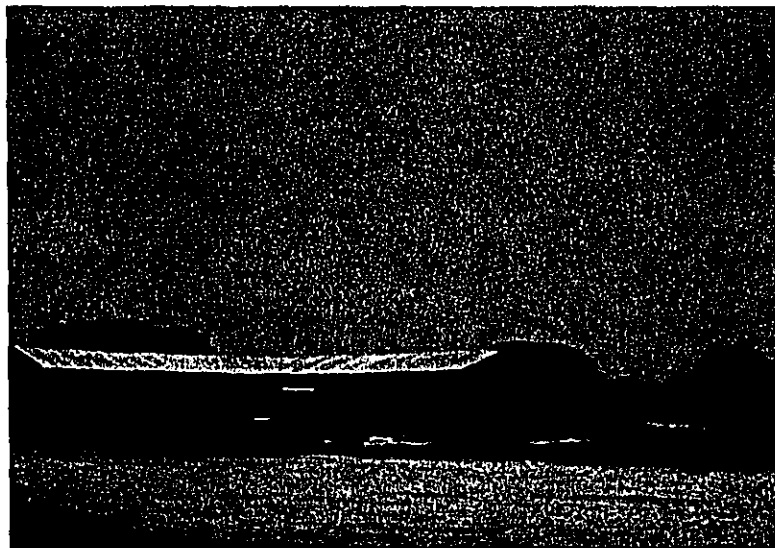
標高が高く雨が豊富，緑豊かな RUNGWE DISTRICT
(頂上まで耕作してある)



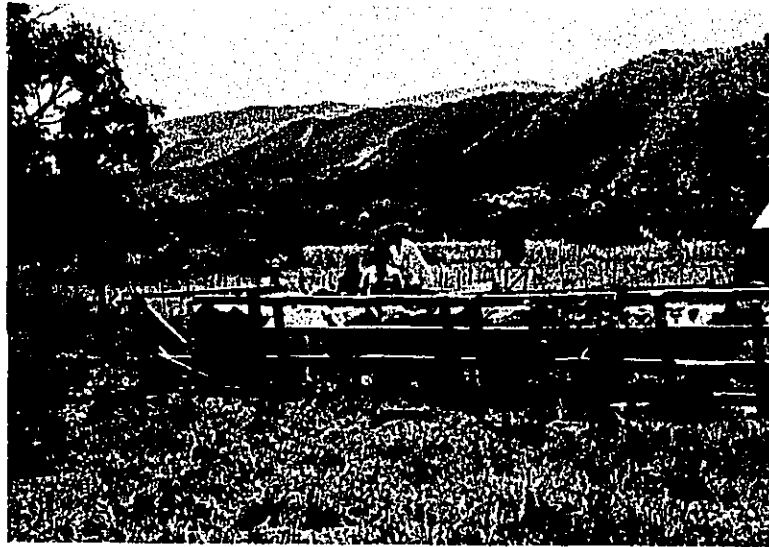
広大な KITULO FARM



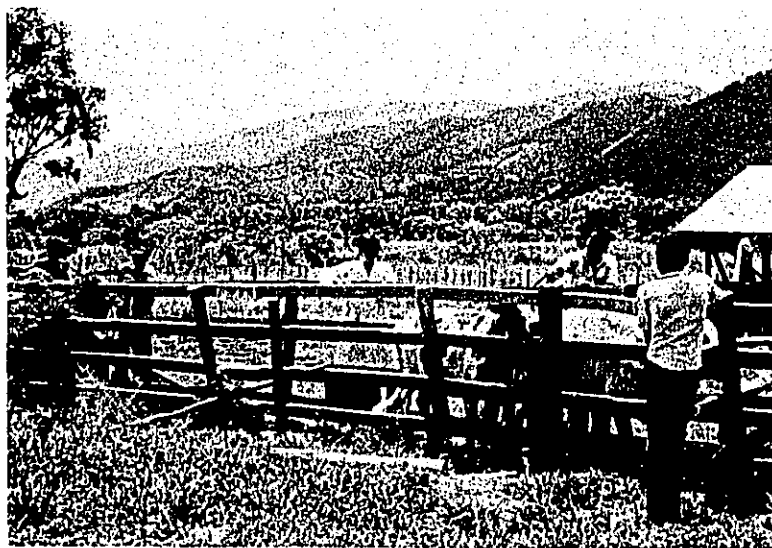
Lake Malawi (KYELA DISTRICT)



CHUNYAのVeterinary Center(種牛センターを兼ねる事もある)



MBEYAのUjamaaでの診療風景（WAMBIRO）



MBEYAのUjamaaでの診療風景（WAMBIRO）

南 隊 員 の 報 告 書 を 読 ん で

松 山 茂

大変長文の報告書であるが、数回くり返し読んでみて、はたと困った。所懐の書きようがみつからないのである。タンザニア国ムベヤ州の畜産事情がいくらかわかったが、南隊員がそこでどのような協力活動をしたかつまびらかではない。そこで、本報告書のみから判読される限りにおいて感じられる南隊員の取り組み姿勢について所感を述べたいと思う。全般的には、家畜の診療に関しては広く取り組まざるを得ない立場にあったようで、各家畜まんべんなくタッチしたようである。特に従来日本の獣医学教育では弱点とされていた鶏に関しても、従って本人も素人に近いと述懐しているところであるが、かなりの識見で対処している点は評価に値する。ただ、かなり貴重なはずのワクチンの大半が棄てられる状態にあった中で、いささか傍観的過ぎる態度をとっている点が気にかかる。つまり、このことに対してどのようにしたら棄てることなく効果的に利用できるか考える努力をした形跡がうかがえないのである。現地に向かいた人ではなかなかいいアイデアは出てこないものである。そういう時こそ日本から持ち込んだ若い頭脳を駆使して対策を考えるべきではなかったかと思う。本報告書を読んでいて同様所感を何度も感じたのは私だけであろうか。

例えば牛の項中、人工授精についても然りである。すなわち、「……難点が多く受胎率も非常に悪い。……繁殖障害の治療薬も無く私にはここに合った方法とは思えない」とあるが、ではどうしたらよいかに関しては一字一句の記載も無い。牛の人工授精に関しては、日本は世界のトップクラスにあり、いくらでも伝授するものがあつたはずである。

もちつ日本での技術がそのまま通用するはずはないが、現状を十分考慮した上で何らかの改善策を講じれば、現地での受胎率が上がるのではあるまいか。そのように誰かに話すなり進言するなりしなかつたのであろうか。もう一つ、最も多い牛の疾病である Tick Fever を予防するため、牛の薬浴を実施したようであるが、薬浴槽の「管理が杜撰、替水をせず」等のため「毎週2回薬浴させていたにもかかわらず Tick Fever に感染した例が多く見られた」

とある。そして「今は結局気休め程度でしかないのは残念である」では、ほんとうに残念である。薬浴がほんとに効果を上げているかどうか実際に調べ、もしほんとに気休め程度であれば、放ってそのような事を行う必要があるのか検討し、最善策はどうすればよいか、若い頭脳でひねり出すという努力をやって欲しかった気がする。そして行動して欲しかったと思うのは現地を知らぬあまりにも無理な注文なのであろうか。

ところで報告書から読み取れるように南隊員は、寄生虫及び寄生虫病の宝庫に飛び込んだようである。もし寄生虫関係の研究者が聞いたらよだれを流しそうな話が報告書の随所にある。もう一度任地での診療記録等をひっくり返していただきたい。その中には、きっと南隊員だけしか経験できなかったような貴重な記録があるはずである。それこそ棄ててしまうのはもったいない話である。しかるべき学会なり研究会なりに報告される事をおすすめしたい。

一方、今後このような宝庫に派遣される隊員は、多忙な業務は十分に理解できるが、できるだけ余暇をみつけて標本なりデータなりの収集につとめられるとよいと思う。必ずしも自分が専門家である必要はない。帰国後母校の先生、先輩、あるいは友人に相談されてもよいではないか。時にはその道の本当の専門家に話を持ち込むという手もある。意外な所で両国の親善及び学問技術の進歩に寄与できるとしたら愉快ではないか。そしてそのことが協力隊の一つの目的でもあることを忘れてはならないと思う。(青年海外協力隊技術専門委員＝獣医師)

苦勞も多い末端組織での活動

総合報告書(51年10月~53年10月) 53年10月25日記
派遣国 タンザニア 51年1次後期組
職 種 獣医師
氏 名 細川 和久
配属先 Ministry of Agriculture,
Livestock Development Division,
District Livestock Development Office,
MWANZA

細川隊員の略歴

氏 名 細川 和久
生年月日 昭和26年9月27日
出身 県 静岡県
職 種 獣医師
派遣期間 51年10月~54年12月

I 2年間における業務内容のあらまし

郡家畜課に配属され、そこに附属する家畜病院が私の職場である。赴任してから2ヶ月程は仕事の内容に慣れるために費やし、その後、診療所の仕事を引き継いだ。仕事内容は次のものであった。

- (1) 家畜の診療及びワクチン接種
診療所内：犬、猫、山羊、羊、家禽、小鳥
野 外：牛、山羊、羊、家禽
- (2) 疾病防遏の相談にくる畜主に対しての助言、および薬品の指示
- (3) 薬品の販売
- (4) 診療費、薬品販売に関する会計管理
- (5) 家畜移動証明書の発行
- (6) 伝染病発生時の家畜移動禁止令の発令
- (7) 食肉検査
- (8) (1)に含まれるが、特に、狂犬病防遏
- (9) 殺ダニ剤での犬の薬浴

1. 家畜の診療及びワクチン接種

勤務時間は、朝7時半から休みなしの午後2時半までだが、途中から食肉検査の業務が加わったので朝5時より午後2時半までが、平日の勤務時間である。そのうち、費やされる時間が最も多いのが家畜の診療である。

クリニック内では主に犬、その他の中小動物、家禽などである。週2回、犬の薬浴を行なった。犬の病気のうち多くを占めるものは寄生虫病で、幼犬では鉤虫症、成犬では糸虫症が多い。野外では、牛の診療が主で、しかしこれは件数は少ない。その理由は野外には薬浴槽管理の獣医(小学校出)がいて、それらの職員がある程度の治療はするからである。

- | | | |
|----------|----------|---------------|
| (1) 犬の病気 | 寄生虫病 | } これらが大半を占める。 |
| | 外 傷 | |
| | 皮膚病 | |
| | 卵巣割去 | |
| | レプトスピラ病 | など。 |
| (2) 鶏の病気 | ニューカッスル病 | |
| | 鶏痘 | |
| | ひな白痢 | |

伝染性コリーザ

C. R. D.

Vitamine 欠乏 など。

(3) 牛の病気 East Coast Fever

肝 腫 症

寄生虫病

気腫疽 など。

(ムワンザ郡にはトリパノソーマ病はない)

ワクチン接種については、犬の狂犬病ワクチン接種、牛の炭疽、気腫疽混合ワクチン接種、口蹄疫ワクチン接種、鶏のニューカッスル病、鶏痘ワクチン接種などが主なものとなった。

2. 畜主に対してのアドバイスおよび薬品の指示

あらゆる家畜の畜主(小鳥も含めて)が相談にくるので、あらゆる知識が必要とされた。ムワンザ郡だけでなくムワンザ州および他の州からくる人々もある。アドバイス後、薬が必要ならそれらを入手するよう指示する。

3. 薬品の販売について

日本の豊富な薬(種類、量)に比べて、ここの薬の種類、量の少なさは格別であるが、それは財政面からきているものらしい。クリニックには州の薬局を通して薬品が支給されてくるが、その量が限られている為、なるべくムワンザ郡内の人に限り、それも、なるべく有効に使われるよう、販売には気を使った。他の郡、州より来た人々には、ムワンザにある他の3軒の薬局で購入するよう処方せんを書くのであるが、薬局でも品切れの場合が多い現状である。

不可欠な薬品は次のものである。

(1) 牛, 山羊, 羊等。

Oxytetracycline

肝腫用駆虫剤

消化管内寄生虫駆除剤

気腫疽, 炭疽ワクチン

口蹄疫ワクチン

(2) 鶏

ニューカッスルワクチン

Oxytetracycline

Vitamine 剤

(3) 犬

寄生虫駆除剤

狂犬病ワクチン

4. 会計管理について

私一人で管理する限りにおいては問題はおきなかった。

5. 家畜移動証明書の発行

犬、鶏、アヒル、猫、牛、山羊、羊等が対象となったが、牛、山羊、羊の場合は郡以外へ移動させる場合、郡の秘書官—C.C.M.(タンザニアの政党)の郡の責任者—の許可を得ることが必要である。これは、制限なく牛等の移動が行なわれ、それによる価格の高騰がおきることを防ぐ為と思われる。牛を移動させるに、牛の足で行なうこの国にとっては、それぞれの地域にそれに見合った頭数の牛がいることが、一定の価格で一定量の肉を供給する為には必要である。

犬については狂犬病ワクチン接種、牛、山羊、羊については気腫疽、炭疽混合ワクチン接種が義務となる。できれば、鶏に対してはニューカッスル病ワクチン接種、牛、山羊、羊に対しては口蹄疫ワクチン接種をも義務とするのが理想的である。しかし、ニューカッスルワクチンは、入手できるワクチンが1バイアル500 doses のものであるため、鶏の1～5羽単位で移動させる場合ワクチンと経費のロス上不可能である。口蹄疫ワクチンは、入手不可能といってもよい状態である。

6. 家畜移動禁止令の発令

2年間に、口蹄疫によるもの3回、ニューカッスル病によるもの1回、狂犬病によるもの1回が発令された。この発令中は、Veterinary Officerの許可がなければ動物の移動はできない。

7. 食肉検査について

赴任してから8ヶ月経過した時点からスタッフが一人転勤になることになり、その穴を埋める格好で食肉検査も業務の一つとなった。この国(首都の近辺は除く)には冷凍設備が無い為、牛、山羊、羊を夜中から夜明けにかけて屠殺し、そ

の朝のうちに店頭に並べ、その日のうちに消費されるという形式が取られている。その為、検査は朝5時頃より始まり、診療所での勤務開始時刻には、大体終るので、時間的には都合がよかった。

一時、肉の価格が値上げされる前には、肉屋が牛を買い控えたため、頭数が減ったこともあるが、最近は屠殺頭数が安定して、牛40～50頭、山羊、羊50～60頭平均というところで、土曜には大体その2倍の頭数になる。これらが、ムワンザタウンの台所に供給されることになる。検査上多く見られる病気は、

(1) 牛

肝臓症、肝硬変、肺囊虫症、筋肉囊虫症、腎炎、胸膜炎、腹膜炎

(2) 山羊、羊

寄生虫病（肝臓症を含む）

などである。

ムワンザでは（他のほとんどの地域でもそうだと思うが）イスラム教の関係から豚肉は一般的でなく特殊な施設（講習所、刑務所など）でしか飼育されていない。

8. 狂犬病について

私が赴任する以前には、ムワンザでは、狂犬病の発生確認は無かったが、赴任後1年ほど経過した時点で、市街より10 km離れたところで発生が確認された。その後市街にまでも発生が見られるようになった。今私が力を入れたいと思っているのはこの狂犬病防遏である。今までの経過については、1977年12月以降の報告書に述べてあるので参照されたい。

9. 犬の薬浴について

ここでは泥棒よけの番犬として犬が多く飼育されているが、ダニが多く週2回、B・H・Cを使った薬浴を準備している。

II 業務の上での問題点その他

財政の貧困さからくる薬品の不足と交通手段が私のバイクだけだったことがあげられる。しかしこの国においては、この状態はまだまだ続くと思われるのでこれらの状況の中で、なるべく効果的な方法を取らなければならない。

ただし狂犬病防遏に関しては実際人の命にかかわることであり、なるべく早く撲滅することが必要であると考え、それを遂行する上での不可欠なものの一

つである交通手段は、現在の私のオフィスで入手することは不可能なため、協力隊事務局に申請した。その他大きな問題はない。また勉強心のあるカウンターパートが欲しかった。私の上司は、協力的であった。

Ⅲ 私生活その他

この国での生活は今までに経験したことのない快適なものである。第一に Veterinary Officer というかなり高い地位にあったこと。第二に現地生活費でかなり高い水準の生活ができたこと。第三に勤務時間の関係上、午後はかなり余裕があり、自分の余暇を楽しむことができたこと。またこれも仕事の関係上からかなり多くの人と知り合いになれた。

健康上の面ではマラリアの他は大した病氣もせずに済んだ。食事は野菜はなるべく欠かさないよう努めた。私の健康管理の手段であるランニングは毎日続けた。

農村にも時々入ることがあり、習慣、食生活なども自分で見ることができ恵まれていた。少教ではあるが気の許せる現地の人も得た。

今、2年間の任期を終え、後1年の延長が決まって、できたら今の状態で何年もこんな生活を続けたい心境である。後1年間、自分で納得のいく仕事をして帰りたいと思う。

日本に帰って考えること

細川和久

この追記は、前記報告書提出後、1年間の任期延長が終り、帰国した時点でのものです。

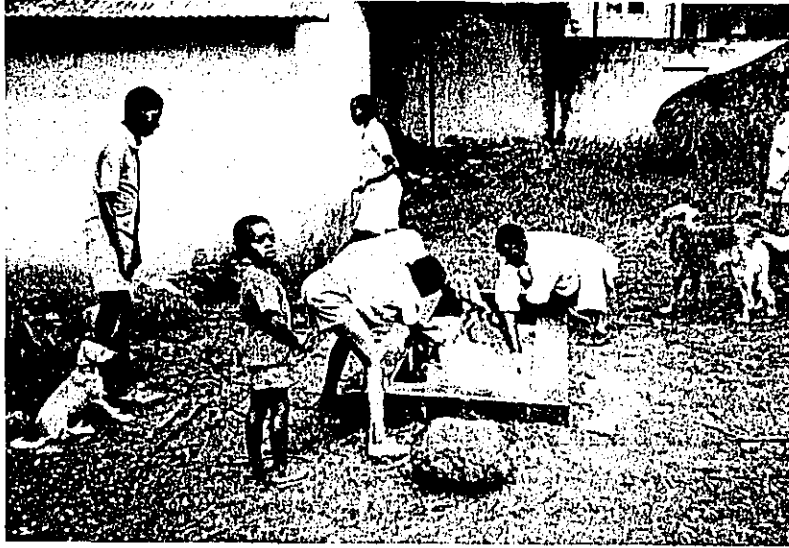
職場の一員としてやれたか——真にその職場の一員としての自覚を持って協力活動をする、ということは、私達、協力隊員に要求されるものであり、隊員として派遣された以上はそういう姿勢を持つことに努めなければならないと思われる。私の場合、日本から協力隊員として派遣されている、ということに笠に着て、日本の社会の中では到底言うことができないようなことを言ったり、身勝手な行動を取ったりしたことが、多々あった。もちろんこれは私自身の人間性に原因していたことではあったが、この、職場の一員となるということに気づき始めたのは、任期も終りに近づいた頃であり、その後もどれだけ真に、職場の一員としてやれたか、と問われれば、自信を持って答えることはできない。この姿勢が身につけば、現地の職場にとっては最良の、隊員にとっても最良の協力活動となるのではないかと思う。

現地に溶け込むということについて——現地の気候、食物、習慣に順応するということについては、生活していく過程で慣れ、あるいは取捨選択するものであり、自分に決して無理のかからぬようにするのがよいと思う。私の場合現地での人間関係においてトラブルが多くあったが、これは今までに日本で暮らし、できあがっていた考え方で押し通したいというところが私にあり、また協力隊員であるということに笠に着ていたことにも起因していたが、現地の人の人間性を理解しようという姿勢がなかったことが第一の原因ではなかったかと思う。隊員は日本人であり、それまでに培われてきた考え方を現地のものに順応させる必要はもちろん無い。ただ、現地の人の人間性がどのような因果で、でき上がったのかを考える姿勢を持つことは、現地の人との関係をスムーズにし、現地の人を理解し、私達日本人をも、もう一度見つめなおすことになるのではないかと思う。タンザニア人も日本人も、また他の人種も本質では変わるところはなく、それらを取り巻く広い意味での環境が、それぞれの人間性

を形成したのだと、最近になってやっと思えるようになってきた。

技術協力という面について— これについては、赴任前は、現地のカウンターパートに講師のような形で指導することを想像していた。しかし、日本での私の実務経験がそれほど豊富でなかったこと、仕事の内容が想像していたものと一致していなかったこと、現地の人もその状況の中では、日本のそれとあまり変わらない位の技術を持っていたことなどから、最初は、私の方が教えて貰う点が多く、技術指導にやってきたというつもりでいた私には、自分に謙虚な心がなかったためつらく思えた。私の場合、任期終了後に仕事を引継いでくれることのできるカウンターパートが得られなかったこともあり、狭義での技術指導という点では残したものはあまりないが、直接に、畜主、飼主へ飼育方法や疾病予防の方法を指導することができた。思うに、その国への最良の協力というのは、狭い意味での技術的な協力ももちろんであるが、その現地の状況の中で、より良い仕事の方法を見つけ、それを現地の人々に示すことだと思う。その過程で日本で言ういわゆる高度な技術の知識、日本での仕事の進め方などは、大きな助けになると思う。特に私達協力隊員にとっては、技術指導ももちろんであるが、隊員の持っている勤勉さ、日本での経験の上にたつアイデア、などによってもその職場をより進んだ方向に導くことができるのではないかと思う。

私の場合、現地での生活は快適に感じ、その生活自体を楽しんでいた時期があった。これも協力隊という後援があり、年齢も若かったから感じ得たものだったと思うが、今考えれば、うわついた気持であったことを恥ずかしく思う。現在、もう少し協力活動を続けとみたいと思っているが、将来の就職、結婚についての不安がある。



犬の薬浴風景



一般農村にみられる屠殺風景

細川隊員の報告書を読んで

松山 茂

2年間の任期を終え、さらに1年の延長が決った時点でも、できれば何年も同じ仕事を続けたいという心境であるということは、やりがいのある仕事を担当してきたからばかりではなく、種々の点で任地での生活がいかに居心地の良いものであったかを物語るものであろう。Veterinary Officer という権力と影響力のある地位を与えられたことを細川隊員はまず感謝しなければならないかもしれない。しかしそういう幸運だけが居心地の良さを、そしてかなり成果のある協力活動を産み出した訳ではあるまい。細川隊員の能力と人柄と努力が、いずれも人並以上のものであったに違いない。

朝5時から午後2時半までの連日の業務をいささかも苦にせず、午後のかなりの時間は自分の余暇として楽しみ「この国での生活は今まで経験したことのない快適なもの」であったと言い切れるのに、多くの隊員は感心ばかりでなく羨望の念を抱くに違いない。しかしその裏には、健康管理のために食事には野菜を欠かさないように努め、ランニングは毎日続けるという努力があったことを私どもは頭に入れておく必要がある。

それにしても多くの業務内容を(軽々と?)こなしているのには感心する。小鳥も含めてあらゆる家畜の診療を行ったという経験は、今後も大いにものをいうであろうと信ずる。ところでその家畜の診療で、医薬品の不足をかこちつつ多くの患者を診療したりアドバイスをしたりしたもようであるが、これらの診療における実績や相談に来た畜主に対しての助言あるいは指示の効果等の記載が無いのがさびしい。話が専門的になり過ぎるため省略されたのかも知れないが、そのような場合(理想とする薬品が手許に無かった場合)いかなる処置をとったか、あるいは知識のない領域の相談を受けた場合どのようなアドバイスをしたか、私どもの興味を大いにそそるところである。治療の効果の有無、あるいはどのような話をすれば畜主は喜ぶか、そして時には失敗談でさえも記載があれば、必ずや何かの役に立つものである。後輩その他のためにもそれが欲しかったと思う。

それはさておき「勉強心のあるカウンターパートが欲しかった」という記述がチ○コットある。本報告書の中の唯一の弱気な告白のようにも受け取れる。偽らざる迷悞であろう。仕事の内容、隊員の立場等にもよろうが、かなり専門的な仕事の場合は有能なカウンターパートをつけるよう協力隊事務局からも相手国に要請すべきであろう。協力隊本来の目的がより効果的に達成されるに違いないからである。一方隊員自身も、現地生活への溶け込みの中で、それらしき人物を物色する試みがあってもよいように思う。

いずれにせよ細川隊員の報告書は読んでいて気持が良い。私は同隊員のその後の報告書も拝見しているが、気がかりであった狂犬病ワクチン接種にしても懸案の機動力を得てバリバリとワクチン接種を行ない、管轄内での狂犬病発生を見ないまでに持ち込んでいる。細川隊員の活躍に大喝采を贈りたい。(青年海外協力隊技術専門委員=獣医師)

あ と が き

青年海外協力隊員の報告書集を発刊するに際し、数多い報告書を、どう分類し、いかに活用するか、いろいろ意見がありましたが、隊員の活動を広く紹介する観点から、今回は国別編とし、昭和54年度、55年度の2カ年で全派遣国編を完了させる予定とし、その後、順次、違った角度で報告書集の作成を継続する方針で臨みました。

国ごとに収録した報告書の数も、諸般の都合で数篇に限定せざるを得ませんでしたし、職種の配分などについても、それぞれの国における協力隊の特徴をカバーしているかなど、不十分な点もあろうかと思いますが、とりあえず発刊に踏み切りました。

ご活用下さる皆様がたのご意見、ご提言をいただきつつ、今後一層の充実をはかりたいと思います。

末筆ながら、この報告書集のために、ご多忙中にもかかわらず、積極的にご協力いただき、報告書に対するコメントをご執筆下さった技術専門委員の方がた、ならびに報告書の収録を快諾され、「追記」の原稿を寄せられた帰国隊員の皆様に厚くお礼申し上げます。

昭和55年 3月

啓発課長 高橋 成雄

海外協力の現場から——青年海外協力隊員の記録〈タンザニア編〉

昭和55年3月発行

編者 国際協力事業団青年海外協力隊事務局

発行所 国際協力事業団青年海外協力隊事務局

〒150 東京都渋谷区広尾4-2-24

電話 (03) 400-7261(代)

印刷所 株式会社 東 沖 堂

(非売品)

